

地域とかかわる
——聞き取りから文字資料へ、そして全体像の解明へ——

大門 正克
(横浜国立大学経済学部教授)

1975 年、大学 3 年生のときに、ゼミナールで長野県の農村に出かけ、1930 年代の農村経済更生運動の調査をした。そこではじめて先生たちの聞き取りを見聞した。修士課程に入り、ひとりで調査に出かけた私は、役場資料などの調査とあわせて、見よう見まねで聞き取りをはじめた。そして現在、聞き取りは、私が地域とかかわるうえで欠かすことのできない調査方法になっている。

2011 年の 3・11 東日本大震災後、岩手県の陸前高田市に通うようになった。きっかけは、震災前に陸前高田市の子どもの作文に出会っていたことによる。2011 年 4 月、私は『J r. 日本の歴史 7 国際社会と日本』（小学館）を発刊した。子ども向けの戦後史の本のなかで、同時代の子どもたちの作文を多数紹介した。そのなかに、1970 年代に陸前高田市や岩手県が推進しようとした広田湾地域開発をめぐり、二人の小学 5 年生が書いた作文があった。震災後、二人の作文が気になり、2011 年 8 月には学生と一緒に陸前高田市にボランティアに出かけ、その後、思いがけず、作文を書いた一人の徳山高志さんが東京にいることがわかり、会って話を聞くことができた。

陸前高田市の市街地は津波で大きな被害を受け、市街地に集中していた市役所や市立図書館、市立博物館、県立高田病院などの公共施設は、壊滅的な状態にある。広田湾開発問題の資料が市内に残されている可能性はほぼゼロに等しいと思われ、私はともかく二人の子どもの作文に導かれて陸前高田市を訪ね、人から話を聞くなかで、70 年代の地域開発問題と震災後の地域のことを考えようとした。

作文を書いた徳山さんの帰郷に誘われ、2011 年 10 月に陸前高田市を訪ね、徳山さんの実家で、作文を書いたもう一人の熊谷みつさんから話を聞くことができた。人に話を聞く余韻が残っていたときのことである。徳山さんのお父さんが、やおら自分の生い立ちを話し始めた。徳山さんのご両親は、津波の被害から間一髪のところ助かった。お父さんは、津波を生きのびた自分の存在を確かめるように、陸前高田市広田町で生まれ育ち、高校教師になった半生を 5 時間以上にわたって話しつづけた。

2011 年 12 月に陸前高田市に出かけたときには、二人の子どもが低学年時に担任だった先生をはじめ、小中学校の先生だった 3 名から話を聞くことができた。複数の人に話を聞くことで記憶が蘇り、話がはずむことがある。そのときもそうだった。すると、3 名のなかで一番年輩の先生が、「広田湾地域開発反対運動の資料を持っている」と言った。私は耳を疑った。これだけ被害を受けた陸前高田市に 70 年代の資料が残っていることなど考えにくかったからである。岩手県教職員組合（岩教組）は 1970 年代の地域開発反対運動の重要な担い

手であり、その人は岩教組の中心人物の一人として反対運動にかかわり、資料を保存していた。聞き取りのあとでうかがわせていただいたその人の自宅は海の近くだったが、津波が入江で分散され、被害を免れたというのである。

津波の被害を生きのびた資料が小さな段ボール箱ふたつに保管されていた。「この資料をどう読みますか」というその先生の問いかけをうけて、私はいま資料を借用して読んでいる。子どもの作文に導かれた私は、こうして思いがけず資料に出会えたことになる。資料には偶然出会えたようにみえるが、私にはまったくの偶然とは思えない。私と地域のかかわり方を整理してみよう。

私にとって聞き取りは、文字資料の調査とともに、欠かせない固有の調査方法である。修士課程のときから聞き取りをはじめた私は、しだいに聞き取りでしかわからないことや、聞き取りで啓発されることがあることを知った。私は調査目的について聞くだけでなく、その人のライフストーリーを詳しく聞くようになり、曲折をへた現在では、地域の人からじっくり話を聞くことが地域とかかわる大事なことだと考えるようになった。

私の聞き取りでは、こちらから質問をつづけるよりも、その人の話すリズムに合わせて聞くようにしている。この聞き方は、受動的なように思えるかもしれないし、いつでもうまくいくとは限らない。ただし、人に「聞く」というスタンスが定まると、私は今まで以上に語り手の話に耳を傾けるようになり、語り手と地域のかかわりや家族のあり方、時代との接点などの理解が深くなったように思う。また、私の側の「聞く」というスタンスは語り手にも伝わり、たとえば徳山さんのお父さんが自らの半生を語ることにつながったり、3人の先生の記憶が蘇って広田湾地域開発反対運動の資料に出会えたりしたのではないかと思っている。

私にとって「聞く」ということは、その地域に暮らし、地域で生きる人たちに即して考えることである。地域には人びとがくらしている。その立脚点をしっかりと定めるための大事な方法が「聞く」ということなのである。たとえば、戦前に満州開拓に出た両親についていき、苦難の引き揚げから戦後開拓地に入った女性には、何度でも「聞く」ことで、複雑な過程や思いをようやく話してもらうことができた。あるいは、1950年代に生活改良グループをつくった農村の女性からは、戦時期の学徒勤労動員にまでさかのぼって「聞く」ことで、グループ設立にかけた思いをようやく受けとめることができた。

地域はもちろん「聞く」だけでは完結しない。地域とかかわる際に私は二つの視点を意識している。第1は、聞き取りと文字資料の二つのアプローチを組合せることであり、第2に、地域はそこに生きる人たちと、政府や地方自治体などとの相互交渉によって成り立つ場であり、相互交渉の解明のためには、両方の側の資料や聞き取りが必要になる。陸前高田市では、市役所や図書館の資料が望めないのが、陸前高田市と大船渡市の地域新聞『東海新報』や、『岩手日報』が重要な素材になるだろう。岩手県教職委員組合の調査や、自治体関係者などの聞き取りも必要だろう。二つの視点を組合せることで地域の歴史の全体像が解明されるはずであり、そのときはじめて、「この資料をどう読みますか」という先生の言葉に応えることができるのではないかと思っている。これから陸前高田市に通う日々が続くそうである。